

「助け手」増やす一歩に

⑥学校の医療的ケアを考える

冬の日の、ある特別支援学校の小学部の教室。児童一人が、5人の教員と二階に過ごす。ある子は絵本を読んだり、別の子はおむつを替えてもらったり。そのうち、一人の女の子の喉がゴロゴロ鳴りだした。

「すみません、喉の吸引をお願いします」。担任教員が内線電話で呼ぶと、数分後に看護師が駆けつけた。細い管を口奥まで入れる。「スズキリした」。看護師のそばで見守っていた教員が顔をなでると、女の子はにっこり笑った。

特別支援学校での医療的ケア（医ケア）と聞いて、その風景をイメージできる人はどのくらいいるだろうか。連載の

のくわいらいささかろう。連載の取材にあたり、私は特別支援学校について基本的なことをほとんど知らなかったことに気付いた。一つの教室に子どもと教員は何人いるのか。教員の仕事内容は。医ケアまでやる余裕はあるのか、教員がやって危険はないのか。

◆ ◆ ◆
県教育委員会が医ケアを教員にも実施させるが明確には決定していない段階で、実名と顔写真入りのインタビューという掲載形式は、現職の教員たちにとって、高いハードルだった。

かつて医ケアの経験があるベテラン教員の一人は、匿名の条件で取材に応じ、「怖が

ることも必要だと懸念を示した。「手先が不器用なので、明らかに医ケアに向いていない教員もいる。どの教員が、どの程度まで行えるのか、線引きが難しい」。子どもの安全を考えるとからこそ、その心配はもっともだった。

県内の特別支援学校に勤める看護師も、教員による医ケアに不安を感じていた。例えば、医療関係者（業人）では、手や器具の消毒をどこまで徹底するかなど、衛生管理に対する意識の差が大きいという。看護師は「複雑な医ケア

の時は、そばで看護師が確認した方がいい。教員と看護師が互いに意見を言いやすい環境をつくってほしい」と話す。

◆ ◆ ◆
取材を終えた今、看護師と現だけに任せている現体制では、十分に安全とは言えないと感じている。全国的にみて、県内の学校に配置されている看護師は少ない。看護師任せになり、子どもの体や健康に対する知識が不十分な教員もいるようだ。依然として、親の負担は重い。

看護師を減らさないという前提で、全ての教員が医ケアの研修を受ければ見守りの目が増える。教員がどこまで医ケアを行うかは、子ども一人一人について、保護者と主治医を交えて判断していけば、安全性を高められるのではないか。

「私たちがやるのは教育で、福祉ではない」。ある教委関係者の言葉がずっと引っかかっ

ていた。障害児教育は進学など分かりやすい卒業後の姿がある普通教育に比べ、その目指す先がイメージしにくい。

だが今回のインタビューで複数の人が、そのゴールは「自立」や「子どもの可能性を引き出すこと」、「たたくさんの人と開わり世界を広げること」だと教えてくれた。その手段である医ケアの充実が、教育そのものだ。

重い障害のある子が地域で暮らすには、医ケアなど生きる手助けをする人がたくさん必要だ。福祉面は大きく地域面での連載をしたことで、少しでも地域に「とまり木」が増えるよう願っている。

◆ ◆ ◆
（この連載は川口安子が担当しました）



医療的ケア（喉（かん）の吸引や管を使った栄養注入（経管栄養）など、日常生活で必要な医療行為。